

アメリカ公立小学校の初等教育と学校文化について ——協同学習の観点から——

但馬 香里*

The Early Education and the School Culture of an American Public Elementary School —From the Viewpoint of Cooperative Learning—

Kaori Tajima*

Abstract

There are lots of theory and strategies of early education in elementary school. This report picks up one of the concept, which is called “Cooperative Learning”, then observed an American Public Elementary School in Foster City, California. Compared to the Japanese elementary school, the American teacher often divided her classroom into several small groups, and then, the children competed and solved their problems in groups. There is also a cooperative learning in Japan, but it tends to be used in the case of learning their social skills in small groups. In America, “Cooperative Learning” strategy is much more used even in a math class, which is known as one of the core subjects than any other subject. The children can also get some rewards after they finish or win their task, which makes them more confident, positive, and determined in their classroom.

1. はじめに

カリフォルニア州フォスターシティは、サンフランシスコ空港から高速道路101号を15分ほど南下したところにある。2007年に家族で渡米し、この地に約2年半滞在した際、子どもたち二人が現地校に通うことになった。その結果、それぞれがアメリカの初等教育（下の子どもはプリスクール、上の子どもはキンダーガーデンおよび小学校1年）を受けることになった。そのおかげで、日本とは大きく異なるアメリカの初等教育を体験することができた。

教育現場では、さまざまな理論と授業プランをもとにしながら、授業が進められていくが、その中で

も特に本レポートでは、協同学習（Cooperative Learning）に焦点を当てて、日米の初等教育の相違点を考えてみたい。

2. アメリカの小学校の特徴

2. 1. 環境的な相違点

アメリカと日本の小学校の違いは校舎の違いから始まる。フォスターシティの小学校では、すべての子どもたちが平等に校庭に行けるよう、校舎はすべて1階建ての長屋のような建物でできており、L字型に取り囲まれた教室の中心が校庭になっている。校舎の近くには、特別高い建物は見当たらず、

* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師
2010年9月17日受理

そのためにゆったりとした印象を与えている。教室の広さは日本と同じぐらいだが、教室内はアコーディオンカーテンでつながっており、隣のクラスと共同で授業を行う場合や、あるいはクラスの半分だけが隣のクラスの子どもたちと交換して授業を行う際に、教室を行き来するのに使われる。カリフォルニア州の州法により、当時はクラスの規模を上限20名としており、教室のスペースは日本よりも子ども一人あたりのスペースが広く感じられる。授業時間は日本とほとんど同じで、8時20分に開始し、2時40分に終了する。水曜日は教員会議のため、ミニマムデーと呼ばれ、ランチを取らずに12時40分に終了する。休み時間は午前1回とお昼休みのみで、各自持参したお弁当か、あるいは3ドル程度で提供されるホットランチを、外にあるランチテーブルで食べる。教員は授業中の一切の責任は持つが、休み時間やランチタイムは自分の休憩時間として自由に過ごす。そのため、子どもたちは休憩時間中に教室に残ることは許されず（悪天候の際には体育館などが解放される）、休み時間や昼休みには、スーパーバイザーと呼ばれる大人が監視役を務める。これらのことから、日本の学校でよく見られるような、休み時間に教員とたわむれたり、一緒にドッジボールをしたり、といった風景は一切見ることはできない。子どもたちが教員と触れ合うことができるのは、基本的には授業の時間の中でのみ可能なのである。

2. 2. 親の関わり—ボランティア

クラスの人数の上限が20名に設定されていることで、日本に比べて子どもの数がかなり少なく感じるが、教員はそれでもクラスに目が届かないからと、親がボランティアで授業のアシスタントをすることをしばしば要求する。仕事の例として、たとえば、morning math（朝の算数プリント）が解けない子どもを個別指導するボランティアや、学校の宿題を子どもたちの持ち帰りバインダーにセットしたり、あるいはコピーを取るボランティア、さらに、学校のおしらせをまとめて配布するための封筒への仕分けを行うボランティアや、遠足の際にドライバー兼、付き添いをするボランティアなど、仕事の種類はさまざまである。また、これらのボランティアが授業中に教室を出入りすることは当然の権利

とされており、誰かの子どもが親が授業中に他の作業をしても、それが当然のこととして授業が行われている。

2. 3. クラス内の様子

子どもたちの授業での発言は、基本的にすべて挙手によって行われる。これは徹底されており、それ以外の発言は授業の妨害とみなされ、たとえ小声で話したとしても、私語を行った場合はすぐに教員から警告を与えられる。それでも私語をやめない子どもは、校長先生の部屋に行かされることがある。したがって、授業中に何らかの発言をしたい場合には、挙手をしなければならず、たわいもない話題や、なんでもない質問も、すべて挙手により発言権を得るという状況だ。

このようなルールのもとでは、特に低学年の場合、授業とは関係のない次のような発言がしばしば行われることがある。たとえば、挙手をして「今日の私の洋服は大好きな水色なの」とわざわざ言うことがある。しかし、このように授業とはまったく関係のない発話がなされた場合でも、挙手をしたために正当な発言権を得たということで、この子どもが教員から怒られることはない。むしろこういった挙手が時々あることは教員も慣れていて、「それはよかったね」などとコメントをするにとどまり、他の発言者の発話を促す。挙手をするという行為の意味が、日本とアメリカでは大分違うようである。

クラス内の席は、日本と同様、通常の授業時間ではどこに座るのが決まっている。席替えも頻繁に行われているが、日本のようにくじ引きやじゃんけんで決まることはまずない。座席の配置やどの子どもがどの席に座るのかということへの決定権は、すべて教員にある。

特に低学年のクラスの場合、教員が本の読み聞かせを行ったり、“Show and tell”¹のように、自分で発表をしたり、あるいは帰りの会の時間を用いた小話を教員が行うなどといった場合には、教室の片隅のカーペットが敷いてあるスペースに皆で集まり、円座の隊形で座ることが多い。

¹ 自分が気に入っているおもちゃや本などを何か一つ家から持ち寄り、ヒントを与えて中身を当てさせる一種のゲームだが、プレゼンテーションの練習も兼ねている。

また宿題を忘れてきた場合や、算数の授業などで、進度に差が出てきてしまった子どもがいた場合には、教室内の片隅にある円卓に座って、個別に作業をする場合がある。

壁には数字や曜日、当番表などを貼るスペースが広く取られているが、それらの図や表などを確認する際には、全員で壁の方向を向いたり（黒板に対して横向きの状態になる）、あるいはその場まで見に行くことがある。つまり、日本の教室のように、授業中は基本的にずっと黒板を向いて座る状態が続くというわけではなく、教員と子どもたちが、作業の内容によって教室内をあちこち移動するケースがしばしば見受けられる。特に低学年の場合、授業への集中が途切れないように、むしろ積極的に子どもたちが座る位置を移動しているようにも感じられる。

2. 4. 個人によって異なるカリキュラム

さて、ELD (English Learners' Development) ^{*2}を受けている、英語を母語としない我が家の子どもたちのような子どもは、授業中にスペシャルプログラムを受講することが義務付けられている。レッスンはおよそ45分間で、大体は授業にさし障りのない作業を行う時間、たとえば図書室から借りた本を読む時間などを利用して行われる。毎日その時間になると、ELDの教員が教室に迎えに来て、クラスの何人かが通常の授業を途中で中断し、レッスンを受けに行くことになるわけだが、授業を抜けてもクラスにざわめきのひとつも起らず、また授業を抜けた本人もまったく気にしていない様子である。

このようにアメリカでは、クラスメイトが学校に滞在している間、常に同じ内容の授業を全員で共有しているわけではなく、個人個人が異なったプランで授業時間を過ごす場合がある。

2. 5. 小学校の授業風景のまとめ

以上のことがらをまとめると、日本では授業中に座る場所が基本的に一日中ほぼ固定されつつ、みな

が一斉に同じ授業を受けているが、授業中の発言は必ずしも挙手で行うという徹底はされておらず、休み時間や給食の時間には、教員も一緒になって過ごしていることがある。このことから、教員と生徒の関係は、感覚的には友達に近い雰囲気がやや感じられ、その権威は絶対的なものではなく、むしろ教員は努力してその権威を低め、子どもたちとの心理的な距離を縮めているようにも見受けられる。

一方、アメリカでは授業中にクラス内を頻繁に移動したり、教員以外の大人がクラスに参加したり、あるいは他の授業を受ける子どもがいたり、みな必ずしも一斉に同じ授業を受けているわけではない。その点では一見、比較的自由な雰囲気を感じるが、一方でそうした教室内の移動を決定したり、ボランティアが必要か否かの判断はすべて教員が完全にコントロールをしている。授業の発言は挙手によってのみ行うことが徹底され、私語は教員が話している間は絶対に許されない。また、休み時間やランチタイムに教員と過ごすことが全くない。これらのことから総合的に考えてみると、教員と生徒の関係は、決して友達のような関係ではなく、むしろ上下のパワー（権力）が存在していることがうかがえる。

3. 協同学習 (Cooperative Learning)

とは

このように日本とアメリカの学校教育は、初等レベルの段階からかなり異なっているということがわかったが、はたして授業の進め方にはどのような違いがあるのだろうか。

ここでは、協同学習(Cooperative Learning)に着目し、この概念がどのようなものなのかを紹介し、実際の授業ではどのように行われていたのかを分析したい。

涌井(2007)が参照した Johnson, Johnson & Holubec (1993)によれば、協同学習は基本的に次の5つの概念から成り立っていると説明されている。はじめに、①「互恵的な相互依存性(Positive Interdependence)」が挙げられている。これは、「目標、ご褒美、教材、役割などについて互いに協力を必要とするような関係、つまり『運命共同体』の関係を作るもの」であり、「全てのグループメンバー

² 移民教育プログラムの一環としてカリフォルニア州で行われているもので、英語を母語としない子どもたちが、授業についていけるように、無料で英語の補習授業を受けることができるもの。

は共有した目標に向かって一緒に働く」というものである。次に②「対面的で促進的な相互交渉(Face-to-Face Promotive Interaction)」が挙げられるが、これは、「仲間同士、援助したり、励ましたり、誉めたりしあうことで子ども達がお互いの(学習の)成功を促進合うという機会を教員が最大限保障する」とこととある。さらに、③「個人としての責任(Individual Accountability/ Personal Responsibility)」が挙げられているが、これは、「個々のグループメンバーは、教材について学習する、あるいは自分の個人目標に到達するよう求められる。」ものであり、「グループメンバーは理解できているかどうかを確認するために、互いにクイズを出し合ったりする」というものである。また、④「社会的スキルや小グループ運営スキル(Interspersonal and Small-Group Skills)」とは、「子どもたちが、質の高い協力ができるように」「教員は、やりとり(turn-taking)、傾聴、自己主張、妥協、意見の対立の解決など様々な社会的スキルを、モデリングやガイド付きの練習やフィードバックの手法によって」教えていく。最後に、⑤「集団の改善手続き(Group Processing)グループの改善手続き」が挙げられているが、これは、「どんな風に仲間を援助したらよかったか等について、グループでのふりかえりの機会を設定する。このことにより、協同学習グループの中で仲間同士がうまく課題に取り組めるような関係を維持するよう意識させたり、グループの成功を喜び合い、仲間の積極的な行動を引き出したりすることができる。」というものである。

では次に、実際に授業を観察したものを協同学習の観点から考えてみたい。

4. 小グループの観察

アメリカの授業風景を観察してみると、最初に目につくことは、2～4名ほどのテーブルごとに、何らかの協力をしながら協同学習(Cooperative Learning)を行うケースが多いという点だ。小グループにおける協同学習は、日米のどちらにも存在するが、日本では集団生活を向上させる場面において、比較的見受けられる傾向にあるようだ。例えば、係による役割分担の例を挙げると、各係は責任を持ってその仕事をこなすわけだが、クラスのあいさつを行う「日直」や給食の配膳を取り仕切る「給食係」、

あるいは落とし物を届けたり管理する「整頓係」や「そうじ当番」などの各係が、小グループで協力し、責任をもってその決められた仕事を行っている。

このように日本では、グループによる責任感と連帯感、社会性を育てるような場面で観察されるものの、その一方で、算数などの主要科目を学ぶ場面では、グループで協同学習を行うスタイルというよりは、基本的には一人一人が机に向かって学ぶスタイルが多いように見受けられる。

これに対しアメリカでは、クラスの中にも係は存在するが、グループごとという枠組みではなく、すべて個人で行われている。たとえば、壁に貼ってある各係の仕事の下には、個人の名前が書かれたカードが貼られており、週ごとに係の交代はするものの、基本的に一つの仕事は一人で責任を持って行うようになっている。そのため、誰かがさぼれば名指しで注意することができるし、誰かがきちんと仕事をこなせば、その個人を褒めることもできる。各係の仕事は、病気などで欠席した場合には、他の者が兼任するなどの措置がとられるほど単純かつ細分化されている。例えば、'line leader (教室から別の場所に移動する際に、先頭で先導する人)' 'line ender (教室移動の際に、最後尾に立って教室の電気を消したり、ドアを閉める人)' 'paper monitor (プリントの教材を配る人)' 'substitute (教員の代わりに、OHC用紙をポインターで示す人)'などが挙げられる。

一方で、算数のような主要科目では、小グループにおける協同学習を行うことが多く、グループ間で競争させる場面がしばしば見受けられる。具体的には、4人ほどの小グループのメンバーが、どれぐらい発言できたか、あるいはどれぐらい積極的に授業に参加したかなどを点数化し、黒板に記入していくのである。

ここで具体的にどのような状況かを説明すると、先ほどの①「互惠的な相互依存性(Positive Interdependence)」が作用しており、「あと何ポイントでテーブルAに勝てる」といった目標が、具体的に黒板に示され、あるいは子ども同士が気づけるように配慮されている。

②「対面的で促進的な相互交渉(Face-to-Face Promotive Interaction)」の例では、声かけが有効な手段であることがわかる。例えば、ある子どもが正し

い答えを正しいタイミングで答えられた場合、教員が“Everybody?”(みなさん)と呼びかける。すると子どもたちは“You’re awesome!”(すごいね!)と声を揃えて誉めるのである。この声かけは、ある程度ルーティン化しているものの、日本ではこのように、授業中に子ども同士が声を出して相手を褒めるという場面はまず見られないのではないだろうか。

次に、③「個人としての責任 (Individual Accountability/ Personal Responsibility)」の例を挙げる。もしグループのメンバー全員が同じプリントの問題を解けない場合は、個々のレベルに応じた問題ができれば良いとみなされることがある。また逆に、全員が通常のプリントの学習を終え、‘extra’な問題(挑戦問題)を解けた場合には、ポイントがより多くもらえることがある。

さらに、④「社会的スキルや小グループ運営スキル (Interpersonal and Small-Group Skills)」の例としては、教員の声かけが、ここでも重要な役割を担っていることが見受けられる。例えば、“That’s a good point.”「今の意見(あるいは質問)は良かったね」や、“Is that mean ...?”「この質問はこういう意味?」と聞きなおしたりすることにより、子どもたちのコメントや質問の質を改善し、向上させる手助けをしているのである。

小学校低学年の場合、⑤「集団の改善手続き (Group Processing) グループの改善手続き」という観点では、子ども同士でお互いに具体的な改善点を議論することはまだ難しいが、これも④と関連して、教員の声かけにより、ある程度は学習することが可能である。例えば、“You need to ask ...” (こういう風に聞いた方がいいわよ)のように具体的に質問の改善を求めるなどが挙げられる。

競争に勝ったグループには、必ず‘reward(報酬)’が与えられる。小さな報酬の例としては、ステッカー(シール)やブックマーク、鉛筆1本などの報酬が与えられる。時には全員よくがんばったという名目で、教員が子どもたちにランチとしてピザを振る舞うこともあった。

5. 考察

ではどうしてこのような学習形態が積極的に取り入れられているのだろうか。

日本での協同学習は、学校生活を送る上で、主に

社会性を育てるような場面において多く用いられているように見受けられる。このことは、のちに社会に出てからも集団で協力し、助けあうことに役立つように思える。しかし、主要教科を学ぶ際には、グループで競争させたり、協力させたりという学習形態よりも、個人が机にむかってじっくり取り組むスタイルがより好まれているようである。

これに対しアメリカでは、係による仕事の分担を行う場面では、グループではなく個人の仕事と認識させ、個人に責任を持たせていた。しかし逆に、主要な教科を教える際には、グループによる協同学習がより積極的に用いられ、他のグループとの競争を頻繁に行い、目標を達成するためにグループのメンバーが協力するという学習方法が好まれていたようである。

がんばった結果、日本ではせいぜいスタンプしか与えられないような場面でも、アメリカでは報酬として、具体的に品物や食べ物が与えられていた。小規模なパーティが頻繁に行われ、あるいは文具などの品物がよく配られることにより、結果を出せば必ず報われるというメッセージが強烈に子どもたちの心にインプットされているようであった。また、このことは子どもたちの学習意欲を高めるためにも一役買っているように思えるのである。

6. おわりに

日本とアメリカの初等教育は、さまざまな点において相違点が見られたが、本レポートは協同学習 (Cooperative Learning) に着目して観察を行った。

今後は教員の声かけの違いや、子どもたちの反応について、言語的な側面からもより詳しく見ていきたい。

参考文献

- 1) 佐伯胖 他編. 1998. 『国際化時代の教育』. 岩波講座 現代の教育 危機と改革 第11巻. 岩波書店.
- 2) 恒吉僚子. 1992. 『人間形成の日米比較』. 中公新書.
- 3) 古谷喜美代. 2005. 「アメリカ公立小学校における学校文化」. 『神奈川大学心

理・教育研究論集 24』. 43-55.

神奈川大学.

- 4) 涌井恵 他. 2007. 「協同学習による学習障害児支援プログラムの開発に関する研究—学力と社会性と仲間関係の促進の観点から」. 『平成 14 年度～平成 17 年度科学研究費補助金（若手研究 B）研究成果報告書（F-140：課題番号 14710117）』. 独立行政法人 国立特殊教育総合研究所.